

The magazine for high net worth individuals

SEVEN.

MONEY CULTURE

世界を舞台に活躍する
資産家のための
マネーカルチャー誌「セブン」

4月25日号

隔月刊 vol.012

パトロへの道 12

江戸小紋の粹

和流アートの新潮流 宮島達男

特集◎インド

マハラジャの新世纪

至宝の輝きは永遠に

特集

New York Renaissance



画家バルテュスとの出会い、結婚によりヨーロッパに移住。現在はスイスのロシニエールにあるグランシャレーに住む、節子さん。「バルテュス財団」名誉会長を務め、展覧会を企画するかたわら、ご自身も絵を描き、着物をデザインし、本を書かれるという。ハイカルチャーの先端で過ごされてきた節子さんにそのライフスタイルを聞く。

節子・クロソウスキード・ローラ・伯爵夫人

La Comtesse Setsuko Klossowska de Rola

1942年、東京生まれ。上智大学フランス語科中退。
1962年、画家バルテュスと出会い、1967年に結婚。
ローマのグイラ・メデイチで15年間を過ごし、
1977年から現在に至るまでスイスのロシニエールにある
グランシャレーに住む。「バルテュス財団」名誉会長。
ユネスコ「平和のアーティスト」任命。多数のメディアに登場し、
著書に「見る美 聞く美 思う美」(祥伝社)がある。

現在スイスにお住まいの節子さんですが、今回、来日された目的を教えてくださいませんか？

NHKの衛星放送で和の世界、「書」についての番組があり、東京、京都、佐賀を巡る6日間の撮影を行うためです。ヨーロッパと日本の血を受け継いだ娘の春美は、4歳の時より書を始め、常に興味を持ち続けていました。書家の石川九楊さんに親子で教わりながら、平安時代の石山切など美しい「書」

の館長をしていて、8ヘクタールの庭の再設計をしたのです。私は主人のそばにいて、ヨーロッパの庭の感覚、というのかしら、それを身につける事ができたのは幸いでした

スイスに移られてからも庭を？

ええ。1754年の木造建築でスイスの国の文化財に指定されています。私共が手に入れる前は英国人の経営する旅館でした。英国式のホテルだったので、お庭も真つ赤なバラが植えられた英国式の花壇だったのです。牡丹の花がないのが寂しくて、フランスから取り寄せました。フランスでは、「七福神」「連鶴」など日本語の品名をそのまま通用させています。主人のお墓には、「西行」という牡丹を植えました。主人は西行の歌が好きでしたので…。いまは私のまったくの楽しみで、日陰には芍薬やツツジ、ほかに日本的なものを挙げれば萬葉などを植えています。日本の文化を大切になさっていらっしゃって素晴らしいですね。和服をいつもお召しななっているのも。

「見る美 聞く美 思う美」でも庭について触れられていますね。もともとは環境に興味があったのですが、二十歳からイタリアで体験したことが、私に多大な影響を与えました。そのころバルテュスはローマにあるメデイチ館（現フランス・アカデミー）

主人からの勧めがあったからです。できるだけ着物でいます。旅行のときはずつと着物で通します。もともと、主人が存命の間は旅行に出ることはめったにありませんでした。なぜなら1枚の絵を描くのに5年とか10年を費



やして、描き始めると動きたがらないのです。私は日本の女性ですから、結婚したら相手に尽くす、まず何よりも主人という考え方で、いつもバルテュスのそばにいました。里帰りすらめったにせず、主人を置いて日本に帰ったのは生涯で2度だけでした。

ご主人とのラブストーリーを、あらためて伺ってもよろしいですか？

そもそもバルテュスが、文化大臣のマルローから派遣されて「日本の古美術を選びに来た」というのが始まりなのです。私はというと当時まだ上智大学の学生でした。バルテュスの公式訪問日程の担当者が友人で、お寺で重要文化財見学の仲間に絵の好きな私を入れていただいたわけなのです。ですから京都で会いました。そして大学を中退して誘拐されるようにイタリアへ渡りました（笑）

いまは節子さんも画家として活躍され、ワインのムートンのラベルも手掛けていらっしゃる。ご夫婦でムートンラベルを飾ったのは、バルテュス夫妻だけと聞きますが

そのようですね。あれはテンペラで描いたものです。油（絵）は主人に禁止されていたものですから。「淡白な日本人の体質に合わないから」と。ですから水彩、テンペラ、ガッシュなど

で描いています。91年のムートンに私が描き、主人は93年のラベルを描きました。

着物のデザインもされているそうですね。

着物もですが、帯なども直筆で描いています。実は、私の着ている和服やデザインした着物、帯もそうですし、主人のために縫ったパッチワークのチヨッキや娘のために作った指人形など、生活がにじみ出るような展覧会を行う予定です。10月に熊本、11月からは東京の西武で。展覧会場では、朝食コーディネートなどの再現などというものもあります。

最後にバルテュス財団の活動、今後についてお聞かせください。

晩年のバルテュスと一緒に設立しました。『画家』は彼の一番大切な部分であり源ですが、バルテュスという人物像を通して彼の独特の生き方や考え方を紹介していきたいと思っています。20歳のころから影響を受け、学び、育ってきた私が、どのようにして皆様と分かち合えるか。これが財団を作った目的です。例えば親交のあった写真家のアンリ・カルティエ・ブレッソンの展覧会は2004年に開催しました。また、フランスの俳優フィリップ・ノワレがヴィクトル・ユーゴー

の詩を朗読し、モーツァルトのコンサートを行なうなど。

グランシャレーの1階を会場にしているのですが、ただの展覧会にとどまることなく、小さくとも雰囲気がある親しみのある、意味のある企画をしていきたいと思っています。



矢幡聡子(やはた さとこ)＝インタビュアー

CORE S LTD.代表取締役。聖心女子学院卒業後、スイス、フランスへ留学。欧州国連本部、小谷正一事務所を経てCORE S LTD.を設立。主な仕事は、国際文化交流事業企画運営。PRコンサルタント、衛星テレビのプロデューサー、エッセイストとしても活躍。

写真＝野地康之

撮影協力：フォーシーズンズホテル丸の内 東京